

多摩ニュータウンの高齢者支援スペースの活動実態に関する考察 —「ご近所ラウンジ」のケーススタディー

多摩ニュータウン ラウンジ
高齢者 地域住民
居場所

正会員 ○余 錦芳*
同 松本真澄**
同 上野 淳***

1. 研究の背景と目的 多摩ニュータウン初期開発地域の諏訪・永山地区は、入居開始から40年近くが経ち居住者の高齢化が進んでいる。団地型集合住宅が多いこれらの地域では、高齢者が地域社会との接点を持ち続けるため、近隣住民との交流の場や自宅外で過ごすことのできる居場所など、地域における自立高齢者の支援環境の整備がますます重要となっている。

研究室の継続的な調査によって、諏訪・永山地区にはこうした高齢者支援スペースが既に10ヶ所形成されていることがわかっているが、これ等は運営形式によって、①場所貸し型、②支援型、③店舗型、④町内よりあい型、の4つの類型がある。本稿は、団地住民の交流を促す④町内よりあい型の「ご近所ラウンジ」をとりあげ、活動実態と参加者の参加状況及び外出行動等を把握することで、自立高齢者が生き生きと住み続けることができる地域環境を構築するための知見を得ることを目的とする。

2. 「ご近所ラウンジ」の概要 諏訪・永山地区では、現在2ヶ所の「ご近所ラウンジ」がある。2008年、諏訪4丁目に「ふらっとラウンジ（以下：Fラウンジ）」が立ち上げられ、翌2009年3月、諏訪5丁目に「ぶらっとラウンジ（以下：Bラウンジ）」も始動し、さらに隣接する永山地区でも現在ラウンジの立ち上げ準備が進められている。

2.1 設立経緯 2007年、「在宅・長寿の我がまちづくりモデル調査」において、多摩市における新たな福祉まちづくりモデルのひとつとして、高齢者等見守り拠点「ご近所ラウンジ」が提案された¹⁾。その具現化に向けた取り組みとして、モデルの対象地でもあった諏訪・永山地区の諏訪4丁目自治会が名乗りを上げ、同年10月試行を開始した。6ヶ月間の試行後、自力運営に移行した。

2.2 運営形態

1) **運営者** Fラウンジ、Bラウンジともに自治会会長が代表である。Fラウンジは運営者と参加者の区別を設けない事になっている。Bラウンジの運営は当番制となっている。2) **活動資金** Fラウンジは自治会費によらず、主に寄付金やフリーマーケットの売り上げによって活動している。Bラウンジは自治会費の一部を活動資金に回している。3) **活動場所** Fラウンジは団地の1階にある既存の談話室とそれに隣接するピロティ部分を改修したスペースを中心としているが、活動内容によってはベデストリアンデッキや近くの公園も使用する（図1）。

Bラウンジは集会所とその周辺のオープンスペースで活動している。3) **活動日** Fラウンジは毎週2回（毎週月曜日及び、第1,3,5週金曜日又は第2,4週土曜日）13:30～16:30に活動している。Bラウンジは毎週1回（土曜日）、13:30～16:30の間に活動している。4) **活動内容** Fラウンジは季節の催しや月末の誕生会以外に、特に決めているスケジュールはなく、普段は談話・喫茶の交流が主である。一方、Bラウンジは前もって決められたプログラムに沿って活動をしている。また、団地の子供の参加も多い。

3. Fラウンジ参加者へのヒアリング調査結果

Fラウンジは毎回、10～20人の住民による談話・喫茶やイベントなどの交流活動をしている。調査者は、この活動に2008年6月から10月にかけて計26回参加し、同年10月11日から11月8日の間に、Fラウンジの参加者23名にヒアリング調査を行った²⁾。参加者の基本属性、参加状況、外出頻度、外出場所、近隣住民との交流等についての調査結果を表1に示す。

3.1 参加者の基本属性 ヒアリング対象者は、男性11名、女性12名であり、その内独居5名、夫婦のみの世帯12名である。年齢は65歳～74歳が多く、特に男性は70歳代前半が多い。居住年数が30年以上である人は全体の半数近い10名である（図2）。又、自治会役員経験のある男性が多い。

3.2 Fラウンジ参加状況 Fラウンジの参加頻度で



図1 Fラウンジの活動実態

は、男性は毎回、女性は月に2~4回の人が多い(図3a)。参加前後の知人(4丁目の住人で挨拶以上の会話をする人)の数を比較すると、参加前に知人数が30人以下の人は、参加後、知人数が増加している(図3b)。当初団地内に知人が少なかった人にとって、Fラウンジ参加が団地内交流を深めるきっかけとなっているといえる。

3.3 外出行動 外出頻度は、85%以上の人がほぼ毎日と回答した(図3c)。外出目的別にみると、仕事や通院では、男女差は見られないが、サークル・習い事は男性に多い(図3d)。外出場所として、集会所、喫茶店、レストラン、医院を多くの人があげている(図3e)。

3.4 参加頻度と外出場所の数の関係 参加頻度が高く他の外出場所の数が少ない、外出行動におけるFラウンジの存在意義が大きいと考えられるタイプは男性に特徴的で、Fラウンジとその他の居場所を相互にほどほど参加しているタイプは女性に特徴的である(図3f)。また、居住年数が長いほどFラウンジ参加頻度は高く、外出場所の数も多い傾向がみられる(図3g)。

4. まとめ 性別や居住年数等により外出行動やFラウンジの重要度は異なるが、Fラウンジは団地内の知人の輪を広げており、交流の場として有効であると考えられる。また、認知症のお年寄りが団地内で迷子になったときに、Fラウンジで知り合った方に助けられたなどの事例もあることから、地域住民の見守りとしての効果も期待される。

本研究は、厚労科研費(H20-政策-一般-012)の助成を受けています。

- 注)
 1) 在宅高齢者の見守り等研究事業報告書:多摩市高齢支援課 2007
 2) 本稿のヒアリング調査は、荒山彩加氏の2008年度首都大学東京建築都市コース卒業研究の成果である。

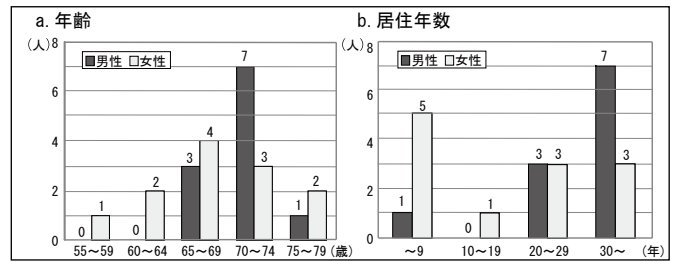


図2 参加者の基本属性

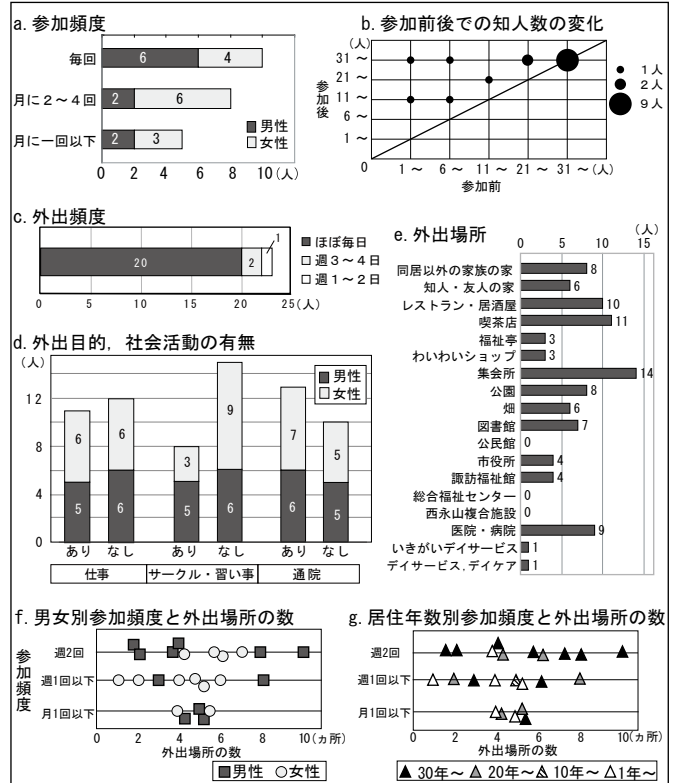


図3 Fラウンジ参加状況と外出行動

表1 個人別に見たFラウンジ利用状況と外出行動

	①基本属性										②ラウンジ参加										③外出行動																		
	性別	年齢	居住年数	同居家族	別居家族	きっかけ	参加頻度	参加頻度の変化	会う	お茶	話し	役割	他	知人の数	外出頻度	同	知	喫	福	わ	集	公	畑	国	市	読	医	い	デ	計	仕事	サ/習	通院	買い物/場所					
居場所多い	A	男	70-	37	妻	南大沢	友	毎回	→					→	毎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	B	男	65-	37	妻	連光寺	友	毎回	→					→	毎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	C	女	65-	37	夫	貝取	友	毎回	→					→	毎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	D	女	70-	37	夫/子	青梅	立	毎回	→					→	毎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	E	女	55-	25	単身	神奈川県	立	毎回	→					→	毎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	F	男	65-	20	妻	上北沢	立	2	→					→	毎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	G	女	65-	32	単身	相模原	立	2	→					→	毎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	H	女	60-	9	子	都内	立	2	→					→	毎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	I	女	75-	11	単身	神奈川県	立	2	→					→	毎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	J	女	65-	6	夫	調布	他	1	→					→	毎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
居場所少ない	K	男	65-	29	単身	連光寺	他	1	→					→	毎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	L	男	70-	37	妻	相模原	通	1	→					→	毎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	M	男	75-	28	妻	都内	立	毎回	→					→	毎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	N	男	70-	36	妻	神奈川県	友	毎回	→					→	毎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	O	女	70-	7	夫	多摩地域	立	毎回	→					→	毎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	P	男	70-	37	単身	都内	立	毎回	→					→	毎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	Q	男	70-	37	夫	日野市	立	毎回	→					→	毎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	R	女	65-	20	夫	稲城	立	2	→					→	毎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	S	女	60-	7	夫	都内	立	2	→					→	毎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	T	女	75-	4	夫	無	通	2	→					→	毎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
U	男	70-	37	妻/子	いない	立	2	→					→	毎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
V	男	70-	4	妻	日野市	通	1	→					→	毎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
W	女	70-	27	子	都内	他	1	→					→	毎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		

* 首都大学東京大学院 都市環境科学研究科 都市システム科学域 博士後期・修士(都市科学)
 ** 首都大学東京大学院 都市環境科学研究科 建築学域 助教
 *** 首都大学東京大学院 都市環境科学研究科 建築学域 教授・工博

Doctoral Course, Graduate School of Urban Environmental Sciences, Tokyo Metropolitan Univ. M. Urban Science.
 Assistant Prof., Graduate School of Architecture, Tokyo Metropolitan Univ.
 Prof., Graduate School of Architecture, Tokyo Metropolitan Univ., Dr. Eng.